

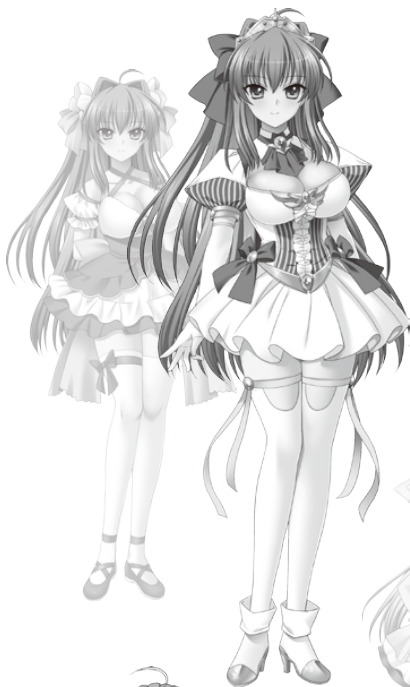


聖戦姫
ウエルキア
ニスターズ
HOLY PRINCESS THE
WELKIA SISTERS

淫間に堕ちたアイドル

小説 筑摩十幸 表紙 亀井
挿絵 しまちよ 原作 桜沢 大

立ち読み版



登場人物紹介

Characters

ヴァルキュア・ムーン／

さくら い なつき

桜井奈月

人気アイドルデュオ“W”の一人だが、その正体は光の国から人間界にやってきた王女である。ヴァルキュア・ムーンに変身し、闇の軍勢ガルドラーダと戦う、優しさと強さを兼ね備えた少女。



ヴァルキュア・フレア／

さくら い あさひ

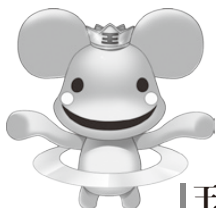
桜井朝日

人気アイドルデュオ“W”の一人で奈月の妹。ヴァルキュア・フレアに変身する光の国の第二王女でもある。ドジでそっかしいところもあるが、負けず嫌いな性格で人気を集める。



アナスタシア

光の国を守護する聖少女で、女王からムーンとフレアの身柄を託される。人間界では、アイドルユニット“W”のマネージャーとして活躍。



ルーティア

光の国の女王で、ヴァルキュア・ムーンとフレアの母親。若しい美貌と、慈愛あふれる性格で、国民たちからも愛されている。



王様

光の国の国王。呪いによりぬいぐるみの姿にされている。しかしそのような姿にされても、女王とは相思相愛の間柄。

レイドルフ

闇の軍勢ガルドラーダを率いる、闇の国の皇子。光の国を侵略し、人間界に逃れたヴァルキュア・シスターズを狙っている。



陸奥マサキ

ヴァルキュア・シスターズの協力者となるカメラマンの青年。彼女たちにエナジーを補給する能力を持っている。



リュードミラ

レイドルフ配下の魔少女。アナスタシアと同じ容姿をしているが、その性格は正反対で、邪悪にして非情。

序
章

第
一
章

迫り来る畏

第
二
章

フレア vs ムーン

第
三
章

灼熱の淫獄

第
四
章

闇のヴァルキユア

007

040

100

153

187

アイドルとは思えない下品な喘ぎがギャグの隙間からこぼれ出る。許容量をはるかに超える快楽刺激で脳神経がスパークし、だんだんわけがわからなくなる。肉も骨もグズグズに溶かされて、自分はもう一つの肉の塊、生きた性器にされてしまったような気がした。苦しくて身体がバラバラになりそうなのに、無意識のうちに挟まれた腰がオズオズと動き出し、サンドイッチ責めに応えてしまう。

（ああ、もう……わたし……もう……）

抗いようもないまま官能の津波に流され、いよいよエクスタシーが迫っていた。だが

「そこまでだ。パピヨン、スパイダー」

「！」

冷酷なレイドルフの命令で魔獣人たちはピストンを止めてしまう。

（狂う、本当に狂っちゃうつ！）

いったいどこまで焦らせれば気が済むのか、果てしない寸止めにフレアの理性の糸は今にも切れてしまいそうだった。

「ククク。どうだ、フレア。最後までイキたいか」

壮絶な陵辱を見ていたレイドルフがニヤリと嗤い、フレアの髪をつかんで顔を上げさせる。

「あ、あああ……っはあっ……ひいうんっ」

ギャグを外された唇から、引きつったような喘ぎが漏れる。限界を超えた焦らしに、ブルブルと不規則な痙攣がおさまらない。

「正直に言わないと抜いちゃうわよ」

パピヨンが触手ベニスをズルズルと引き抜きにかかる。切なさが爆発し、肛門粘膜が必死に異形ベニスにしがみつく。

「あ、ああ……ダメ、抜かないでっ！」

もう自分を制御できず、切羽詰まったおねだりが飛び出してしまった。ハッとして口をつぐんでもすでに遅く、ヴァルクシアとしてのプライドは敗北感にまみれ、ズタズタに引き裂かれていく。

「ククク。ならばこれをしゃぶれ」

唇に何か硬いモノが押し当てられる。すぐにレイドルフのペニスだとわかったが、それを拒む力は残されていない。

「はああう……んっんっ、むぐうん」

（私……自分からレイドルフのオチンチンを……）

フレアは半ば自棄気味に口を開き、宿敵のペニスを迎え入れた。視界を塞がれているのがせめてもの救いだろうか。

「んちゅ……くちゅ……ねろ、れろおっ」

舐めるほどに闇のオーラが、ペニスを通じてフレアの口中に流れ込んでくる。それにあわせて蝶男と蜘蛛男の剛棒からも、闇のオーラが流れ込んできた。

「あ、ああああ……あひやあああ……っ！」

ゾクゾクゾクツと冷たくおぞましい波動に三つの孔を侵蝕されて、フレアは金髪を振り乱して悶絶した。闇の魔素が神経に血管に入り込み、全身に広がってくる。普段の状態なら簡単にレジストできただろうが、聖気を失いつつある今のフレアには、抗う術はない。

「フフフ。闇のオーラを吸収しろ。そしてガルドラーダの新たな女幹部ダーク・フレアに生まれ変わるのだっ！」

（いやっ！ ガルドラーダの幹部になんて……それだけは……それだけはいやあっ！）

光の戦姫である自分が闇の眷属にされてしまうなど絶対に許されない。

だが焦らされ続けた女体は男根をしつかりくわえ込んで放そうとしない。舌をねっとり絡ませて男根を磨き、アヌスは蛇ペニスをさらに深く吞み込もうと蠢く。爛れた媚肉がギョツと収縮し、熱蠟のような愛液を剛毛ペニスに吐きかける。

「ふむうっ……やらあ……んちゅぱっ……いやなのにい」

唇はマサキにする時よりも激しく宿敵の肉棒を貪り、アイマスクの上からもわかるほど表情がとろけている。サンドイッチに挟まれた身体を波打たせ、送り込まれる闇の波動を、

腔とアヌスで積極的に吸収しようとしている。そこに勇ましいヴァルキュア、愛らしいアイドルの面影はなく、堕ちた肉奴隷の淫らな姿があるだけだ。

「あふん……お尻が……アソコが……んちゅば……お口があ……あはうん……とまらないよおっ！」

冷気が染み渡った後、今度はヒリヒリとヤケドしそうな熱さが全身に広がってきた。まるで無数の蛇が股間から這い出て脊椎をよじ登ってくるようだ。

闇の侵蝕が進むにつれて、フレアの身体を包んでいたヴァルキュアの聖衣から聖なるオーラが失われ、ボロボロに裂けていく。

「ククク。始まったな」

フレアの腰から太陽を象徴するまつ赤なスカートが消えて、妖美な煌めきを持つモルフォ蝶のような羽が生えてきた。

「あああ……こんなあ……んちゅ……らめえ……お、おおっ……くちゅんっ」

闇のオーラに侵蝕された腰から、おぞましい淫熱とともに、ゾクゾクと心震わせる昂揚感がこみ上げてくる。それと同時に脳裏には、洗脳で植えつけられた姉とマサキを殺す自分の映像が何度もフラッシュバックした。

「んはあ……マサキ……んふっ……お姉ひゃん」

血にまみれた自身の姿を夢見ながらウットリ微笑むヴァルキュア・フレア。そこにはか

つてない邪悪な恍惚が浮かんでいた。

「悪の芽は深層心理にまで擦り込まれている。もはや洗脳装置も必要ないほどにな。クク」

洗脳の手応えを感じつつ、闇の皇子は猛る剛棒をフレアの喉深くにピストンさせる。

「んふうう……むふつ、あうん」

フレアも僅かに首を左右に振るが、抵抗と呼べるほどではない。肉棒を軸に紅潮した顔を捻ったり、舌先で龟头を押したりする行為は、むしろ愛撫と言ってもいいだろう。

「悪に目覚めるのよ、ヴァルキュア・フレア！」

「早く、オ、オデたちの仲間になるんだよお」

二匹の魔人たちもここぞと責めを加速させてきた。ゴツイ肉瘤がGスポットに食い込み、獣毛が柔褰をゴシゴシとブラッシングする。長大なストロークの往復運動が肛門粘膜を捲りかえらせ、動物的で本能的な排泄快感を呼び起こす。焦らしに焦らされた肉はブレーキの壊れた機関車で、法悦の終着駅を目指して暴走していく。

「ンはあああ……おとおっ……こすれて……あひい……イイ、イイ……たまんないよおっ！ あああン、ああんっ！」

浅ましいヨガリ声も抑えられなくなり、フレアは手足を突っ張らせて三孔の快美に酔いしれる。その間にもフレアの身体は変化を続けた。純白のニーソックスが艶やかな網タイ

ツに変わり、精悍なブーツも異様に高いセクシーピンヒールへと変化する。

「あ、あああん……変わっちゃう……わうしい……んああ……変わっちゃうよお……んちゅばあ」

「もうすぐお前は悪のヴァルキュア、ダーク・フレアに生まれ変わるのだ」

「はああ、はああん……私が……ダーク……フレアに……ああつ、あああんっ」

アイマスクを外されたフレアは媚びるような視線をレイドルフに向けてしまう。闇の属性が強まるにつれて、闇の支配者であるレイドルフへの忠誠心が芽生えてきたのだ。

「そうだ。お前はムーンよりも強く、美しくなれる。俺はお前の素晴らしさを誰よりも理解している。だからムーンよりもお前を選んだのだ」

フレアの中の劣等感を巧みに刺激し、魔界へと誘うレイドルフ。

「はああ……本当に？ 私がお姉ちゃんより……強く美しくなれるの……？」

過酷な責めに疲弊しきったフレアにまともな判断力が残っているはずもなく、崩壊寸前の意識が甘い言葉に吸い寄せられてしまう。

「もちろんだ。俺が力を与えてやる。ムーンも勇者も見返してやれ」

「あ、ああ……レイドルフ……さまあ……くちゅちゅぷっ」

キューンと胸が切なくなる。その瞬間、フレアの中ですべてが百八十度転換した。愛と憎悪、正義と悪、光と闇。すべての価値がひっくり返り、世界が反転した。

（この人は私のこと、わかってくれる……私を大切にしてくれる……）

レイドルフに奉仕できることが嬉しくて仕方がなかった。窄めた唇が肉棒の上を滑らかに上下し、ツイントールが振り子のように揺れる。押し寄せる肉の快美にガーターストッキングの太腿が痙攣するたび、腰の青い蝶の羽が妖しく煌めいた。

「あああうんっ、変わっちゃう！ わたしい……ふあああん……変わっちゃうのおっ！ か、変わるのがある……あむうん、気持ちいいのおっ！ ああん」

官能曲線が上昇するのと反比例して、魂は底なしの深淵に一步ずつ嵌まり込んでいく。天国と地獄を往復しながら、少女はほっそりしたウェストをしならせて、二本差しの肉棒をギユウツとしごき上げる。

「おお、すごい、締まって……搾り取られそうよ」

「こつちもすげえ。キツキツのマンコがしゃぶりついて、チンポが溶けそうだぜえ」

ヴァルキュアとして鍛え上げた肉体は、淫乱奉仕にも有効なようで、魔獣人たちは今にも射精寸前に追い込まれていた。

「どうかね。闇の衣は？ 気に入ってくれたかな」

「はあっ、はい！ き、気に入りましたあ……あ、ありがとうございます……レイドルフ様あつ」

もう自分が何を言っているのかもわからない。身体の中に湧き起こる荒々しい衝動に流

されるまま、愛しい男根を舐めしやぶり、牡の匂い漂う陰囊にまで舌を這わせていく。

「母親を犯し、魔人を孕ませた男のペニスにしゃぶりつくとは、母娘そろって淫乱だな」

「ああん……レイドルフ様あ……私もお母様みたいに……あふん……犯して……ま、魔人を孕ませてえ……んく、ちゅばあっ！」

耳まで赤くなりながら、羞恥を誤魔化すように可憐な唇を思いきり広げ、太く硬い男根を根元まで呑み込んでしまう。湧き出る先走り汁を美味しそうに飲み下す喉元には、嚙體どらと蜘蛛をアレンジしたチョーカーがグロテスクに輝く。

闇の侵蝕の激しさを物語るように、フレアの身体の大半は悪のコスチュームに包まれ、ヴァルキユアとしての名残は、もうほとんど残っていないかった。

「ククク。可愛いやつめ」

ペニスを通じ、フレアの中の聖気が急速に闇気に入れ替わっていくのが感じられ、レイドルフは満足げに頷く。最大の強敵、伝説の聖戦姫ヴァルキユアをついに手に入れたと思うと、胸が熱くなる。

「おお、これほどとは……」

「なんと美しく、なんと邪悪な姿だ」

魔獣人たちも思わず畏怖の念を抱くほど、闇の眷属へと墮落したフレアの姿は妖しい魅力に満ちていた。二人の獣人の特性を取り込んだことで、蝶の美しさと毒蜘蛛の凶悪さを

融合させた究極の魔獣人へと生まれ変わっていくのだ。強い光を持つ者ほど、堕ちた時はより強力な闇の者へと変わる。今のフレアはどの魔獣人にも勝る最強の女幹部だ。

「はあはあ、レイドルフ様のミルク、欲しいの……ああん、早く飲ませてください」

赤い瞳は淫蕩に潤み、肩をくねらせたり、腰を振ったり、全身を使って肉棒に奉仕する。かつて殺意を込めて睨みつけた瞳は、恋する少女のような媚と潤いを帯びて、レイドルフに向けられている。ヴァルキュアとして闘った聖少女の面影はもうどこにもなかった。

「欲しかったら、まず名前を言うのよ。あなたは何者なのかしら？」

様子を見ていたリユードミラが、宿敵であるヴァルキュアを屈服させる昂奮にペロリと舌なめずりする。

「あ、あん……私はガルドラーダの……女幹部……ダーク・フレアです……ああん」

レイドルフの目を上目遣いに見つめ、ハッキリした口調でフレアは言いきった。口にしたことで爛れるような隷従の悦びが全身に広がるのを感じ、ブルブルと瘡おこりにかかったように身体が震える。

「ウフフ。では勇者のことなど忘れて、レイドルフ様に忠誠を誓うのね？」

最後の質問をされて、ドキンドキンと心臓が口から飛び出しそうなほど高鳴る。僅かに残った理性の欠片がチクリと胸を刺すけれど、それも墮落の悦びを増幅させるスパイスでしかない。

「はあはあ……私は勇者マサキと別れ……これからはダーク・フレアとして高貴で偉大なる皇子レイドルフ様に一生死ぬまで絶対の忠誠を……はあうん、誓います……あ、ああゝゝゝゝんっ」

言い終わった瞬間脳内に閃光が走り、フレアは軽いエクスタシーに襲われてしまう。

三つの孔をすべて犯され、ヴァルキュアとしての力すべてを失い、闇の力に屈服する。最悪の事態のはずなのに、それがなぜかフレアの心を甘く腐敗させる。もっと堕ちてみたいという狂った欲求に突き動かされ、激しく腰を振りながら自らマゾの毒蜜にどっぷりと浸かっていく。

「よく言えたわねえ、フレアちゃん……いえダーク・フレア様！」

パピヨンのペニスが根元まで埋め込まれ、激しく脈動した。根元がポコッと球のように膨らみそれがそのままフレアのアヌスの中へ――。

「ひいい、あつ、あああ―――つつ！」

腸の中を大きく熱いコブが駆け上がってくるのを感じ、フレアの背中中はゾゾッと総毛立つ。まるで火の玉をお尻にぶち込まれたような異様な感覚。そして深く一メートル近く潜り込んで、勃起先端に達した直後、もの凄い勢いで白濁が噴き出した。そこはちょうど子宮の裏側だった。

ドビュッ！ ドビュッ！ ビュルルッ！

「はひいんっ！ お、お尻の中にいごんごん入ってくるう！ あああ……すごいっ、子宮にまで……響くよお……ああうん！」

普通のアナルセックスとはまったく違う場所に淫熱射精を感じさせられて、フレアは異様な快感に悶絶した。まるで子宮にぶっかけられているようだ。

「あ、ああああ……お尻も子宮も……感じちゃうう……これすごいっ！」

その後も蛇腹ペニスは断続的な拍動を繰り返す。次から次に射精コブが腸内に潜り込んできて、子宮の辺りにドバドバと熱精をまき散らす。あまりの勢いに、フレアのお腹が見える膨らんでいく。

「グハハアア、新たな女幹部の誕生に祝福を！」

続けざまに蜘蛛男も射精し、膣奥に濃厚な子種汁が撃ち込まれた。

ドビュツドビュツドビュツ！

「あがあああああああつ！ ああ、またあ！ 出されてるうっ！ し、子宮にきてるうっ！」

異様に粘度が高い濃厚精液が、子宮口や柔褰の一枚一枚にべっとり粘り着く。鳥もちのように粘着し簡単には外れない。

「俺のは濃いからなあ、一時間経っても熱いままだぜえ」

「んああつ……あついいい……オマンコ燃えちゃううっ！ 同時に中出しなんてえ……あ

ひいんっ！　　すごすぎるうっ！　　ああああん」

蜘蛛男の言う通り、強烈な淫熱がいつまでも子宮の底を焙り続ける。前後から灼かれる子宮が溶鉱炉のように赤熱し、微かに残った理性もすべて焼き尽くそうとする。

「ああ、ああおおっ！　　イイですッ、前にも後ろにもお、中出しされまくって、最高のなお！」

凄まじい快感に脳がバターのようにとろけていく。マサキのことなどまったく頭に浮かばなかった。

「ああ、もうイキそうなのお！　　レイドルフ様あ……レイドルフ様のミルクも飲ませてください！　　はああん……どうか私と一緒にい！」

二孔に注がれた邪精に狂わされ、フレアは闇皇子の勃起に熱烈に舌を絡める。頬を窄めてバキュームしながら、鈴口に舌先をねじ込もうとすらすらする。闇に堕ちたフレアの口淫粘膜は、闇皇子のペニスと肉の相性が抜群で、かつてない快感をレイドルフに与える。

「おおっ！　　いいぞ、ダーク・フレアよ」

聖母ルーティアに続けてその娘も陥落させた歓喜と昂奮が、勃起の中を駆け巡った。

「さあ、我が精を飲み干せ！　　ウオオオッ！」

ドビュドビュッ！　　ブッシャアアアッ！

もう堪えるつもりもなく、ありつただけの欲情を堕ちた聖少女の唇に吐き出した。

「あああおつ！ レイドルフ様あ！ んく、ごきゅ、むふうっ……はああ、まら、まら出てリユう！」

次々に撃ち込まれる白濁精液をフレアは喉を鳴らして飲み干していく。熱く重い粘り気が喉を伝って落ちていく感覚、胃の中にトロリと落ちる感覚が、レイドルフからの愛情に感じられ、至高の幸福感に包まれた。この快感、この男のためなら他のことなどどうなってもいいと思えた。

「あああ、レイドルフ様！ イク、イキますうっ！」

プッシヤアアアアアア！

腰の羽をパタパタさせながら盛大に潮を噴くダーク・フレア。白目を剥いた瞳から随喜の涙がこぼれ、緩んだ口からザーメン混じりの涎が垂れ流しになる。孔という孔に注がれる邪精と闇のオーラにヴァルクユアとしての心は崩壊し、完全に悪に染まりきってしまう。僅かに残っていた聖衣も完全に消え、おどろおどろしい蜘蛛の巣模様のスーツがダーク・フレアの身体を包んだ。

「ククク。フレアは堕ちた。残るはムーンだけだ」

さらなる野望を胸に、黒き仮面の皇子は高笑いするのだった。

その頃ミネルヴァでは――。



「レイドルフ様が直々に私たち姉妹を孕ませたいと仰ったのよ。嬉しいでしょ」

「そ、そんな……レイドルフに……っ!?」

「これから勇者や戦闘員のザーメンを掻き出して、オマンコ綺麗にしてあげるね」

妹の愛らしい唇から次々と吐き出される卑猥な言葉に、ムーンはショックを受ける。ガルドラーダによる洗脳が心の深部にまで及んでいるのだろう。

「そしてエナジーも全部吸い取ってから、レイドルフ様専用のオマンコに改造してあげる」姉の苦悩をよそに、ダーク・フレアは楽しげに囁いながら杖を一振りする。すると燃え盛るマグマの中からどす黒い触手が生えてきた。火の力を操るフレアが召喚したのはやはり灼熱の触手だ。

表面の黒い部分が割れ、中からまっ赤な溶岩が湧き出る。それがさらに割れて、新たな熱気を吐き出しながら、マグマ触手が筈のようにムーンの身体を目指して伸びていく。

「や、やめ……うああああっ!」

シューウウウウウツツ!

触手がスーツの中に潜り込み、肌に触れた瞬間、蒸発した汗が白い湯気を上げる。ヴァルキユアの身体は特殊なフィールドで守られているが、すべてを防げるわけではない。

「熱いでしょ。ウフフ、強がったところでお姉ちゃんの弱点はわかっているんだから」

「あ、ああああ……フレア……っくう……ああ、うううむっ!」

灼熱触手が舐めるように肌の上を移動すると、焼けつくような熱さとともに、エナジーがゴッソリと吸い取られる。

（そんな……ヴァルキュアの力が……失われて……!!）

聖なる力を失ってしまったえば、フレアもただの無力な女の子でしかない。そうならば二度とガルドラーダと闘えなくなってしまうだろう。なんとか触手から逃れようとするのだが、宙吊りの身体では何もできない。

「や、やめなさい……フレア……ううう……あなたは……レイドルフに操られているのよ……あああうっ」

首や太腿、くびれ腰に巻きつかれてギリギリと締め上げられると、苦しさや熱さの二重の責め苦で意識まで遠くなる。

「私は正気だよ。闇の力を与えてくださったレイドルフ様に心の底から感謝しているの。お姉ちゃんももうすぐそうなるよ」

別の触手が股間に迫る。他の触手より二回り太く、まるで丸太の杭だ。形もどこかペニスを彷彿とさせるおぞましい触手だった。しかも表面には紫色のイボが無数に突き出しており、その一つ一つが妖しく明滅している。

「はああ……まさか……それは……」

その輝きに不吉な予感が走る。見ていてだけで感じる全身の脱力感が、その紫の光の正

体を暗示していた。

「気がついた？ これは幻魔石。ヴァルキュアの力を無効化しちゃう呪われた石だよ」

その輝きを見つめ妹はうつとりと微笑む。闇に堕ちし者には、幻魔石の光はそれだけで恍惚感を与えてくれるのだ。

「ウフフ。身体の中から吸い取ってあげるよっ！」

逞しい男根型触手が、クレヴァスにグツと押し当てられる。シュウツと音がして蒸気が上がり、吊られた身体がギクンと反り返った。

「や、やめてっ！ そんなモノ入れないでっ！」

「お上品ぶっちゃって。これくらいでなきやお姉ちゃんのユルユル不倫マンコは洗浄できないよっ」

妹の操る極太触手が、情け容赦なく姉の膣孔を抉った。

ジュブジュブジュブッ！ グチュンッ！

「あひいっ！ あきやあああああ~~~~~~~~っつっ!!」

巨根に拡張される衝撃に悲鳴が迸り、灼熱の熱さに悶絶させられる。さらに幻魔石のイボが食い込んでまっ赤な稲妻が背筋を駆け上がって、脳内にバチバチと火花を散らした。

「はあ……はあ……っくうう……んっ」

股関節が外れそうな巨根責めに、さすがのヴァルキュア・ムーンも息も絶え絶えだ。頭

がガクンと前に垂れ、苦しげな喘ぎを漏らす美貌も引きつっている。それでも媚孔は精一杯広がって、巨大な責め具をくわえ込んでいる。粘膜がヒクヒクと蠢く様は、さらなる責めを待っているかのように淫靡だ。

だが苦しく辛いはずなのに、貫かれた腔洞からはジリジリと爛れるような快美が湧き起こる。衆人環視の中何十人もの戦闘員たちに輪姦された記憶が蘇り、次第に身体が熱く火照りだして、思わず腰を振り立ててしまいそうになった。

(ああ……だめよ……)

浅ましく反応する自分の身体が信じられず、動揺するムーン。自分が思っている以上に肉体は墮落させられてしまったのだろうか。

「アハハハッ。嬉しそうだね。でもこれからが本番だよ」

龟头部を埋め込んだ灼熱触手が、巨大なドリルのようにゆっくりと回転を始める。

ギユル……ギユル……グチュルルル……ッ！

「ひあ……うあああ……あああッ……そんなあ……すごすぎるう……ひ、ひいん……こ、壊れちゃうっ！」

回転の速度が上がるにつれて、桃色の粘膜が巻き込まれながら捻れ、奥へ奥へと引き込まれる。螺旋に並んだ幻魔石のイボがグリグリと蜜襲を挟り、粘膜に食い込んでくるのまたまらなかった。まさに掘削といった凄まじい威力だ。

「ンあ……やめて……あつ、あああつ……幻魔石が……イボが……ひいつ……擦れてるう……っ！んあ……やめてえ……あああ……お腹が……裂けるうう……ンあああつ！」

釣られた魚のように身を暴れさせても極太触手は抜けない。やがてドリル触手は最奥に達し、ズンッと子宮を持ち上げてようやく止まった。串刺しにされるような圧迫感に襲われながらも、同時に身体を中心に駆け抜ける快楽電流にムーンはヒイッと喉を絞った。

「苦しいとか言ってるわりに全部入っちゃったじゃん。他人の恋人を誘惑するだけあつてスケベな身体だね」

「ハアハアッ……そんな……勇者様のことは……仕方なく……あああう……」

全身を夥しい汗にまみれさせ、ピクピクとつま先を痙攣させる。だが噴き出した汗は熱さのせいだけではないだろう。極太に串刺しにされた蜜孔から、愛液がジワジワと滲み出し、灼熱に焙られてはシュウツと音を立てていた。

「次はお掃除だよ」

フレアがパチンと指を鳴らすと、幻魔石のイボが一斉に輝きを強め、エネルギー吸引を開始した。

ヴィイインッ！　ジュルルッ！　ギユチュッ！　ヴィイイイインッ！　ジュルルルウウッ！　デウルデウルデウルウッ！

粘ったいやらしい水音を盛大に立てながら、ムーンの光のエネルギーが撃ち込まれていた

ザーメンとともに幻魔石に吸い込まれていく。

「ひいあああつ！ ああつ……お腹の奥があ……吸われて……ンあああああつ！」

宙吊りの身体をガクガクと痙攣させ、亜麻色の髪を振り乱すムーン。無防備で柔らかな身体の内側、それもヴァルキュアにとって最も大切な子宮から直接エナジーを吸収されて、拘束を千切らなばかりに手足が突っ張る。

「どンドン精液が吸い出されていくよ。いっぱい出されたんだね」

「ハアハア……あつ、あああつ……だめ……ああ、ああむ……勇者様の……取らないでえ！
はあ……はああんっ！」

「だめ。お姉ちゃんを孕ませるのはレイドルフ様だけなんだから」

極太触手が大蛇のようにうねり、臍洞の隅々までイボだらけの龟头が搔き回す。脈動する太い胴の中を駆け下っていくのは吸い出されたザーメンだろう。精液とともにエナジーを吸い取られ、ムーンはだんだん力が入らなくなってくる。意識も朦朧とし始め、身に纏っていた青い聖衣も剥がれ落ちていく。

「ハアハア……ンああ……力が抜けて……あつうっ……ううん……吸わないで……ヒインッ！ あついい……奥に響いてえ……あああ……もうやめてえ……あああんっ！」

炎の熱がゴオツと苛烈さを増し、防御を失った乙女の肌をジリジリと焙る。そのたびにムーンはグラマーな汗まみれの総身をくねらせた。重そうな乳房がタプタプと弾み、飛び

散る汗が炎に飲まれてシュウツと音を立てる。

(このままじゃわたし……壊れちゃう……死んじやう……っ)

熱気に灼かれ、極太に犯され、エナジーを吸い取られ……何重もの責めにムーンは精神は限界ギリギリまで追い込まれる。今にも意識を失いそうになった時、ドリル触手の回転が止まった。

「はあっ……はあっ……もうやめて……ううっ……はあ……っ」

残酷な拷問をしておきながら魔に堕ちた妹姫は涼しい顔だ。吊り上がった紅眼は嗜虐の昂奮に潤み、姉の秘部を覗き見る。

エナジー吸収触手をくわえ込まされた臍孔は無惨に拡張され、フレアの拳でも入りそうなほど。グッタリした身体の中でそこだけ括約筋をヒクつかせ、溢れ出る愛液がいやらしい牝の色香をムンムンと振りまいている。それはまだ未成熟な身体 of 妹の癪に障った。

「幻魔石で責められて、こんな濡らして。突っ込んでもらえんなんでもいいんですよ。いやらしい淫乱な牝豚！ それならもつと味わわせてあげるよっ！」

ダーク・フレアが杖をかざすと、さらなる触手が伸びてムーンに襲いかかる。吸血蛭のような丸い口を開き、ニップルにクチユツと吸いついた。

「あひいっ！ な、なに……？ あきやあああんんっ!!」

乳頭を激感に貫かれて、朦朧としていたムーンは無理矢理覚醒させられる。

「ンあああつ！ む、胸からも吸われてるう……あああうつ！ エナジーがあ……」
真空状態に吸われて乳首が触手の中で見る見る勃起させられていく。さらに触手の内側には細かな歯が生えており、伸びきって敏感になった乳頭に甘美な痛みを突き立ててくるのだ。

「そのデカイおっぱいでマサキを誘惑したんでしょ」

「ああ、そんなこと……ああう……」

ムーンはハッキリと否定できなかった。妹を救うためとはいえ、抱いて欲しいと言ったのは確かに彼女自身なのだ。そこにマサキへの想いがなかったと言えば嘘になる。

「ちよつとデカイからつていい気にならないでよね！ 目障りなのよ！」

ダーク・フレアの恨みが乗り移ったように、蛭触手の中から針が飛び出し、乳首を垂直に刺し貫く。

「あぎいいいいっ！」

まるで灼け串を突き通されるような痛みと灼熱感に空中で胸を反り返らせるムーン。針はかなりの深さに達し、おそらく乳房の中ほどまで食い込んでいるだろう。

「オッパイもメチャクチャにしてやるんだから！」

ドクンツと針から何か熱いモノが注入される。それは強力な催淫媚毒だった。

「ンあああつ！ む、むねがあ……あ、あついい……っ!!」

乳腺が灼け、乳房脂肪が煮えたぎる。まるで溶けた鉛を流し込まれたような猛烈な熱さが、乳房全体を包み込む。乳房が一回り大きく膨らみ、乳肌がパンパンに張りつめていく。

「はあうっ……ああああ……な、なにかがあ……ンあああ……くるうっ」

乳腺の中をマグマのような灼熱感が這い上がり、乳頭に向かって這い上がっていく。息詰まる切迫感に心臓も肺腑も握りつぶされてしまいそう。呼吸すらままならず、ヒッヒッと喉を絞り、ムーンの手体が空中でエビ反る。蛭にくわえ込まれた乳頭がグンと大きく勃起した、その直後――。

ブシヤアアアアアアッ！

「ひいああああああああああつ！」

双乳から二筋の白泉が勢いよく迸り、蛭触手の中にジュルジュルと吸い込まれていく。熱い液体が乳管をくぐり抜けるたび、痺れるような快美が脊椎にぶち当たり上下に分かれて脳幹と子宮を同時に感電させた。

「アハハハッ。母乳が出るようにしてあげたのよ。お姉ちゃんみたいな淫乱の牝牛には相応しい姿ね」

「はああ……はああ……母乳……って……」

罵声を浴びせられてもムーンは反論する余裕もなかった。母乳と同時にエナジーを吸い取られた瞬間、凄まじい快感の稲妻に乳肉を貫かれ、頭の中が真っ白になってしまったの



だ。

「男の射精の数倍の快感が得られたハズ。どう、気持ちよかったでしょ」

「ハアハア……ああ……もうやめて……フレア……」

胸からエナジを吸われたせいだろうか、聖衣のかなりの部分が明滅した後、青い燐光となつて消滅してしまう。

（……このままじゃ……私……）

ヴァルキュアのエナジが完全に尽きようとしていた。一度変身を解除されてしまえば、エナジを補給するまで変身することはできない。そうなれば勝ち目はない。

「穴という穴からエナジを吸い取ってあげる。マサキなんかじゃ満足できないように、お尻もお口もおマンコも、エロエロにしてやるんだからっ！」

さらなる触手が前後からムーンに忍び寄る。

「このいやらしいお尻でもマサキを挑発したのね！」

「きやうっ。そんなことしてな……ひあああああっ！」

問答無用とばかり、アヌスのすばまりをこじ開けて巨大なミミズのような触手が直腸内にズブリと侵入した。排泄専用の狭い穴を拡張され逆流される異様な感覚に、ムーンの身体が伸び上がる。

「いやいやあ……抜いて、抜いてえ！」

「初な反応だね。勇者はここは触ってくれなかったの？」

「あ、当たり前です！ 私たちはそんな変態みたいなことしません！」

プリンスであるムーンにとつてアヌスは不浄の排泄器官でしかない。そんなところを愛撫するなどあり得ない非常識だった。

「レイドルフ様はお尻まで愛してくださるの。お姉ちゃんももうすぐわかるよ」

「そんな……お尻なんてだめっ！ 絶対にいやっ……あう、ううむっ！ そんな、お尻の中に……ああ……入ってくるうっ！ ンああうんっ」

生まれて初めての肛虐にムーンは必死にお尻をくねらせた。なんとか追い出そうと下腹に力を入れるのだが、太い触手の侵攻を押しとどめることはできない。直腸から大腸へ、およそ一メートル近く侵入されて、ようやく止まった。

「うぐぐ……ああ……くるしい……同時になんてえ……だめえ……はああン」

極太触手だけでも辛いのに、さらに前後二本差しで責められ、ムーンは息も絶え絶えに喘ぐばかり。少し前まで処女だった少女には残酷すぎる責めだ。

「うるさいお口は塞いじやうよ」

もう一本のミミズ触手がムーンの唇を狙ってきた。

「ひいっ！ いや……あ、あう……んむうっ！」

噛み縛ろうとした歯並びを強引に割り裂き、生臭い触手が口腔に潜り込む。

「そんなにイイか。夫がいるのに浅ましいことだな」

「ああ……パンター様……あの人のことは……あああんっ……仰らないでくださいませ」
夫のことを言われて淫気にとろけていた美貌が微かに曇る。色地獄に堕とされ、奴隷のように扱われながらも、まだ心のどこかに貞操観念が残っており、それがルーティアを苦しめるのだ。

「グルルル。よいではないか。卵を孕まされ、ボテ腹にされ……このような淫らな身体で夫のもとに戻るハズもあるまい」

「ンあああああんっ♥♥」

ギユウツと下から双乳を締め上げられて、ルーティアは背筋を反らす。グローブのように大きな獣人の手指が乳肉に沈み込むと、膨れ上がったニップルから母乳の白い筋がシャワーのように迸った。

「たとえここから逃げ出しても、お前の身体はもう夫のモノでは満足できない。俺様のチンポなしでは生きられないのだ。そうだろう？」

残酷に囁きながら巨根で子宮をこね回す。

「あっ、ああああ……そ、そうですわ……おとおうつ！ 淫乱でドスケベのルーティアは……もう……夫のモノでは……満足できません……あああ……パンター様の……オチンポなしでは……はあうん……生きていきません……あああんっ♥」

娘に見られていても知らず、ルーティアは獣人に求められるままに卑猥な言葉を紡ぐ。「グフフ。少し前まであれほど国や家族のことを思っていたではないか。どうして心変わりしたのか。俺様に教えてくれないか、女王陛下？」

パンターが牙を剥き出しにして意地悪く嗤う。

「はああ……はあつ……そ、それは……」

過去の自分を思い出させられ、ルーティアは屈辱にアイマスクの下の眉をたわめる。哀れな女王には、奴隷に墮落し快楽に溺れることも許されないのだ。

「私は……肉体を改造されて……ま……魔獣人様の卵を……産むための機械にされましたの……ああ……そしていっぱい孕まされて……魔人の卵を何個も産まされているうちに……女の……はあうん……いえ……牝の悦びに目覚めたんです……ああん♥」

おぞましい過去を反芻することで、ルーティアの脳裏には恥辱にまみれた調教の記憶が蘇る。そこにパンターに犯される快楽が上書きされ、倒錯したマゾの悦びとしてフィードバックされるのだ。

「はああん……牝の悦びを教えてください、ボテ腹の変態妊婦奴隷に調教していただいて……ああ……ルーティアは……レイドルフ様にとつても感謝してますう……」

「はああ……光の国も……家族も……ヴァルキュアもお……もうどうでもいいの……あああ……早く産みたい……この無様な不倫ボテ腹の中にいっぱい溜まった卵を……はあう

ん……産ませてくだされませえ……ああん♥」

母乳でいっぱいになった双乳と、卵で膨らんだポテ腹をタプンタプンと揺さぶりながら、逞しい獣根で我が身を串刺しにする。

ズーンズーンと撃ち込まれる自虐のピストンが子宮を突き上げ、中に溜まった卵を攪拌した。排卵の欲求がこみ上げ、騎乗位の身体が徐々に反り返っていく。

「あああ……もう産まれそうです……うふうん……パンター様……卵、産まれそうなお……はああ、あああおおおお……むうんっ」

肉悦と同時に母性を刺激され、ルーティは母乳と愛液の雫を飛ばしながら獣のように浅ましいヨガリ声を迸らせた。一国の女王だったとは思えないほどの、淫乱な痴態だった。

「ああ……お母様……」

そんな姿を見せつけられ、ムーンは愕然とさせられる。あの淑やかで気品に溢れた女王が、ここまで淫らに調教されてしまうなんて。あまりのことに言葉も出ず、混乱したムーンの身体はまったくの無防備状態。その隙をレイドルフが見逃すはずがない。

「ククク。お前もあのようになるのだ、ヴァルキュア・ムーン。勇者のことなど忘れ、俺のチンポだけを求める牝犬になるのだ」

絶望的な未来を予告しながら蜜壺に二本の指をそろえて沈める。内部はすでにトロトロ

にふやけていた。

「あああ……私は……そんな風には……なりません……あああ……ン」

「ここに俺の子を孕まされても、そんな口がきけるかな」

「ああ——っ！」

ズブリと指を根元まで埋め込まれ、キーンと鉄琴を打ち鳴らしたような快美が脳に突き刺さる。

（な、なんなの……これ……？）

これまで感じたこともない凄まじい快美感を膣内に感じ動揺の悲鳴が迸る。しかしその声は濡れた、どこか甘えるような音色だった。まるで快感のスイッチを埋め込まれ、それを押されているようなのだ。

「たとえ勇者でも、他の男の子供を身籠もった女を相手にすると思うのか？」

指を抜き差しし、耳たぶを囁る。囁く言葉は麻薬のようにムーンの脳に染み込んで、理性を狂わせる。

「ああ……やめて……妊娠なんてさせられたら……もう勇者様に……会えません」

「そうだ。だからルーティアも諦め、堕ちたのだ。あのようにな。女とは儚いものよ」

中指と人差し指で蜜壺を掻き混ぜながら、恥骨の裏辺りをコリコリと刺激してくる。さらに乳房を円を描くように揉み回す。

「あ、あ……あああんっ！ そんな……なにこれ……だ、だめえ……ああうん」

まさか自分の膣内に幻魔石を埋め込まれているとも知らず、ムーンはヨガリ泣きの悲鳴を上げ続けた。

身体中でいくつもの快感が交錯し、ぶつかりあい、融合し、巨大な官能のうねりを造り出す。特に膣内に感じる魂に直結したような快感は凄まじく、津波のように何度も何度も押し寄せる肉悦に、理性までも呑み込まれ、我を忘れてしまいそうだ。

その間にもルーティアの腰振りダンスは激しさを増していく。

「ンあは……あああん！ パンター様、パンター様あ……♥」

ジュボッ！ クチュッ！ ジュブブッ！ グチュンッ！

上下する白桃のような尻タブの合間で、出産直前の桃色粘膜が捲りかえり、獣人の剛棒を破廉恥な牝蜜で磨き上げていく。ヌメヌメと輝く獣根はいつそう生々しく、牡のパワーを誇示するかのように、ますます反り返っている。

「グルルル。さすが妊婦のオマンコは違うな。熟れて柔らかいくせに……ハアハア……ぎゅうぎゅう締めつけてきやがる。犯せば犯すほどよくなるぜっ！」

硬化した海綿体を溶かされてしまいそうな快美にくるまれて、魔獣人の肉棒の中を快楽の紫電が流れ下る。密着感が凄まじく、血管や神経が繋がってしまったのではないかと思

うほど。妊娠状態にされた完熟果肉の妖美な味わいは、魔物ですら唸らせるほどの快楽器官であった。先に射精させられてたまるかと、パンターはルーティアの弱点であるポルチオ性感帯を狙って、肉棒を突き上げた。

「ンあああ……っ！ ああああんっ！ そこお……あああ……子宮に当たってますう……ふうあああ……そんなにされたら……卵が……アアン……産まれてしまいますわあ……たまんないい……あああん♥」

身体が浮き上がるほどの垂直ピストンに、お腹の中で卵が暴れ回る。コツコツとぶつかりあう感触が脳髓にまで響き、出産間近の多幸福感が虹色のベールとなってルーティアの意識を覆っていく。

「グルルルッ。そんなに卵を産みたいか」

「は、はいい……産みたいです……あああん♥ 早く産ませてくださいませえ……ああん……もう我慢できません♥♥」

切羽詰まったようにハッハッと喘ぎながらボテ腹を揺らす様は、まさに出産直前の妊婦そのものの姿だ。双乳から溢れた母乳で膨れたお腹が濡れていくのも背徳的だ。

「グフフッ。牝め。ではこうしてやろう」

パンターの腕が素早く動き、ルーティアのアイマスクを剥ぎ取った。快楽に赤く上気した淫蕩な表情が完全に晒される。

「あ……」

何度か瞬きした後、その眼が大きく見開かれた。ガラス壁の向こうに娘のムーンを見つけたのだ。

「あ、ああ……そんな……っ！ い、いやあああああっ!!」

激烈な羞恥に身を灼かれ、ルーティアは金髪を逆立てて絶叫する。憎むべき獣人相手に濃厚なボテ腹セックスをしているところを、実の娘に見られてしまったのだ。

「お母様……お母様！」

ムーンの悲痛な声がスピーカーから聞こえてくる。その声は自分を非難しているように聞こえた。

「いやいやあ！ 見ないで……ああ……恥ずかしい……こんな姿……娘に見せないでえ……ああんっ！」

「いやと言いながら、この孕みマンコは俺のチンポを放す気はなさそうだぞ」

抵抗を鼻で嗤い、パンターは力強い律動をこれでもかと子宮に叩き込む。緩みかけた子宮口を尖った亀頭でさらにこじ開けようとする。

ジュブッ！ グチュッ！ ズブズブズブズブウッ！

「そんなあ……あおおおっ！ ふ、ふかしい……あんんっ！ そこはラめえ……う、産まれてしまいますう……あ、あああんっ！ 見ないでえ！」

孕んだ子宮を刺激され、産卵の切迫感と絶頂への期待感とが入り混じる。娘の存在に僅かに回復した理性も、あつと言う間に被虐の激流に押し流されていく。

「ハアハア……見られてるのに……ンああ……イヤ、イヤ……アヒッ……こんな……イイ……オマンコ……ああ……感じちゃう……だめなのに……イイのお……ッ！」

金髪を振り乱し、ルーティアは牝声をこぼし始める。おぞましい調教と改造を受けた肉体は、どんな状況でも食欲に快楽を貪ってしまうのだ。

「グクククッ。娘の前だというのにやらしい牝だ、ルーティア。これがお前の本性だ」
「ンあつ！ パンター様あ……お、お許しを……はあうっ！ 娘の前で、卵を産むなんてえ……ああつ……恥ずかしい……はあ、はあ、ああン……恥ずかしいのに……腰がとまらない……♡ あああうん……そんなにされたら……産みたくなくなってしまううっ……あああん♡♡」

獣人の上でM字のがに股を屈伸させるたび、鉄のように硬く太い巨根が蜜壺を抉り、鋭角に飛び出たカリが柔髪を擦り上げる。普通の女なら壊れてしまいそうな異常なサイズだが、ルーティアはしつかり根元まで呑み込んで、恥知らずな牝蜜を溢れかえらせている。

（あああ……やっぱり……私、もう……）

人外のデカマラが送り込んでくる愉悦は凄まじく、血も肉も、魂までも溶けてしまいう。これと較べれば以前の夫とのセックスなど児戯に等しく、絶対に満足できないだろう。

(この快感から……はなれられない……)

墮落してしまったという絶望が胸を抉るが、それさえもマゾの情感を燃え上がらせる。もつともつと、二度と這い上がれない地獄の底まで堕ちてみたいという、狂った破滅願望に突き動かされ、ルーティアは孕み子宮に自虐の剛棒を食い込ませていく。

「グフフウッ！ そろそろイかせてやるか。娘の前で産卵するのだ」

奴隷女王の締めつけにパンターもそろそろ限界が近づいていた。ルーティアの腰をガツシリとつかむと、巨大な亀頭を子宮口にグリグリ擦りつけ、重点的に責め始めた。

「ああっ！ あああおおおっ！ 奥に……お腹に響くう……っ♡ あ、あああ、あああん！ 卵があ……あひっ！ う、産まれちゃうう……っ♡♡」

子宮内の卵と亀頭に挟み撃ちで責められて、子宮口のポルチオ性感が爆発し、まっ赤な官能の火柱が女王の裸身を焼き尽くす。稲妻のような衝撃が子宮から胃を突き抜けて脳天にまでビリビリ伝播する。

「はあ、はああっ……あああむ……ムーン、見てえ……あなたの母は……孕みマンコでセックスするのが大好きな……ああ……変態妊婦なの♡♡ ああん、イイ……浮気大好きい、不倫大好きなおっ♡♡」

娘が耳を塞ぎたくなくなるような破廉恥な台詞が後から後から飛び出す。その口から勃起ペニス飛び出すのではないかと思うほどの苛烈な突き上げを受けて、ルーティアの身体が

弓なりに反っていく。後ろ手に縛られた手が、白くなるほどきつく握られ、ブルブル痙攣する太腿が獣人の腰をキュウツと挟み込む。緊縮する蜜襷が、剛棒を食いちぎらんばかりに締めつけた。

「おおおっ！　くらえ、牝めっ！」

逞しい肉杭がドスツと子宮の底に突き刺さり、鈴口が子宮口と密着した。

ドビュッ！　ドビュッ！　ドビュルルルウウウッ！

「ヒィッ！　アヒィィィ——ッ!!」

凄まじい勢いで噴き出した灼熱の獣精が、子宮口をくぐり抜け胎内に雪崩れ込む。卵を押し分け、内側の粘膜にぶち当たり、白濁流が渦を巻く。大量射精で子宮が膨らみ、その圧力が一気に卵を押し出した。

「あきやあああああああああああああああああつ!!」

絶叫と同時に腰が浮き上がり、パンターの逸物が膣孔から抜け出る。

ポツカリ口を開いた蜜洞から撃ち込まれたばかりのザーメンがドプツと噴き出し、押し流されるようにして白い卵が姿を現した。

「ンああ……ああ……でりゅ……ああおおおおう……産まれりゅう……っ！」

ググツと背筋が反っていくにつれて、サーモンピンクの膣粘膜がザーメンと愛液を溢れかえらせながら内側から盛り上がり、捲りかえって驚くほど拡張されていく。縦筋を刻ん



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！



**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！



**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！



リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！



あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！ <http://ktcom.jp/> 検索

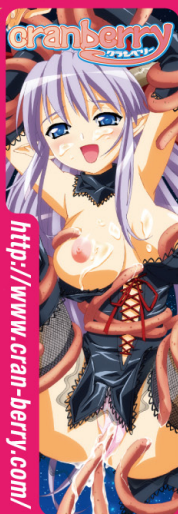


電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンライン漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!